草木育種 上

農商務省圖書
第九ノ二〇七號
共 冊

太政官文庫
和書門
一二五〇號
函
架
二冊

263
内閣文庫
和書
一一五〇
四冊
八三函
六架

内閣文庫

番號	和 11150	
冊數	4（1）	
函號	183	263

耕種

内閣文庫

あめつちの[illegible]はじめ[illegible]よろつ

[illegible]や[illegible]て[illegible]

木の[illegible]日や[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]出[illegible]

[illegible]人と[illegible]

[illegible]

[illegible]の

あら[illegible]

明治十七年購求

文化戊寅新鐫

灌園岩崎先生著

草木育種（さうもくそだてぐさ）

全二冊

江戸書肆
千鍾房
玉山堂 合刻

ら経のうちにもおほくあらはしゝ記人あまたあれと
孫まて伝へて記しおかれ侍りしこの事し
にあらはしくむかしの紀を伝へ擇るなり
毋ふかくよめてすゝむみえたるをもて北淮
歳まてとほからぬ風しれるはまゝあ
このぬのあらはれあらはしくといへとほさか
常に紀物 文書ともおほしきハあり
孫くにも経にしるし九百ふしめつ世にかくた

やまとふみにかへあつめまいらしころ
この紀あつめし我くまんそうしを語ると
なをおほく梅花とをねそ經をさため
こゝにおいてとくに草花の紙に記しらの
郷のふるさきことうまくあつからはしめこ
ふるまへにもさくさくるま和漢になさけいくと
それしむる常とやら海のさそて文化
十とせ行ちる種にのせたる月の季に紀

秋草ふきぬきのあまりのありし出
世にしりて其のかみのいゆかりもす
あるは都のなみすみて遊ひらの
草那これをとゝめのちにあそ何しめる
しゆきぬるとともにすみとらへあらぬ
こと諸つ緑かきはまりの流れくにふ方みさ
たのしみかつあまり遠からむふかきこ
とし伝をあまり侍こともや本を作をやし

草木はへにみ道し好ふことゝるな
驚険いゝとたちふかぬ事みなし
むそ地の和をしれこるをりしの知蹊書

草木育種序

孝經曰因天之道就地之利是種草木之法也不可不淺也夫穀可不飢緣夫木而不究其多端而索定其麻而庭栗民去治病芬香延邪矣花艷草以為美觀且采晉菜以養々後草木之位大危氣自發菜好軒岐之道以為學會者不盡于藥性名技術不明友博讀諸家本草及物産之書於

此外屋蝕山壁之属或其財可花諸奕邪
培圃者至若至于一千餘種而草木蔓者
然也性孫隨其性各芝不無殖玄金友為
姿飛者隨風越山河而還孫生所衆学鳳
仙蓋其実偶也破壊而蕃生深藻隨室暖
而浮池節花実生而庭波蔓芳世眼る左
纒于竹籬寄生扶于木派而保生如蘿冒
宗霧而娘生莨孫子芒根寄化彙而生状

央之無手而貼籬壁是皆造化自然之理
門假人力乎夫草木之本其生也其死
也其人皆同而主也然人為萬物之霊然
長雜其長能生蘇其生換回造化在掌握
友孫窟其燥湿庭其室暑火各之所其性
頚幽寺奕域南北易地人力亦可以奪其
功形其理而隨其性萬不失一条性嚐本
草之栄種藝也法不求而得之培藝生度

豈不如令高平武耳手足之忌哉銀秋英
奇也種但可見國家以菜出名為草木育
種唯邇種藝日用之一助云爾
文化丁丑孟日出于又玄堂岩崎常正

漢南吳定明書

草木育種目録

巻之上

序　凡例
草木の徳を知る事
草木に陰陽ある事
土地の善悪并水之事
草木に吉日凶日并宜を忌との事
下種の事
澆灌并培養の事
接法　きりつぎ　こうりつぎ　たちつぎ　そぎつぎ　よびつぎ　さしつぎ　ちやつぎ　あつぎ　よせつぎ　根つぎ　并圖

擺 附り壓條の事 并 圖

移樹 并 伐木の事

瓮盆の事 附り 養花插瓶の法

除蟲法 并 蟲の圖

暑寒風雨霜雪の節并滑の事

塘窖塗壁の事 并 圖

種樹運送の事

巻之下

穀菜果藥品花木類百八十五品手入の法

草木育種凡例

一 草木手入の事ハ。上巻に十四ヶ條をあげて。種樹の要用を著す。その時節においてハ不同あり。縦令ハ南国ハはやく。北国ハおそく。又東西によりてもいさゝか異同あり。况本邦と漢土と時節の遠あるハいふべし。茲にしるすところの時節ハ。東都においての適時を述ぶ。其余の国々ハよりて考べし

一 凡穀類菜類の内日用の物をおもに挙て。次に果類薬品草木類又花草ふして賞すべきもの。文雅に備ふべきもの。又手入むづかしき類の栽法をしるす

一 和名を挙て漢名をしるすと。又漢名にて通称さるものあり。

菊牡丹芍薬の類は漢名をまず挙。和名をも又諸國の方言
多ければ其内通じ呼名を挙ぐ。尤も見易からんがためなり。
且和名漢名ともに一二名を挙げて同名異物を知らしむ

一草一木の手入の事は下巻に委しく。其一品に述る所の土
地の善悪時節。接木等の事は本の類は接法并に本より末
に至る迄除き其外皆生るみその手当の事を委しく記すを旨と

一總て草木の類幾百と云ふ数あれども悉く一品ごとに手
入を述るに暇あらず。先一類の内一品を挙て亀鑑とす。其
類の物は大抵同じ手入なり。且其類多し。其類を察し考て
知るべし。猶天時の事は種樹書群芳譜花鏡等の書を考べし

一野必大本朝食鑑。向井氏庖廚本草の作ありて食物功
能を審にし。宮崎氏農業全書は種樹日用の事に詳なり。
漢土にありては賈思勰齊民要術は民用種樹の法并に飲膳
食治まで備ふ。兪宗本郭橐駝等の種樹書陳扶搖秘傳花
鏡の書皆種樹の事を載す。此類の書猶多し。考索べし。
此等の書にかぎらず。凡て引書は挙て其法の傳来を知らしむ

一近世の秘法と自試の法とを加へおれど属に假名を以てし。漢
文に傳注をするものは童蒙に見易からしめんがためなり。然ども
予が陋拙文詞を綴り。謬誤あるべく。観者が委しく解
かざらん事を恐る。追て此修改せしむるの事を欲するのみ

草木育種巻之上

東都　岩﨑常正　編録

草木に徳をしる

後京極摂政 良経公 作庭記曰。人の居所の四方に木をうへて四神具足の地となすべき事○経云く家より東に流水あるを青龍とす。もし一所の水なければ柳九本をうへて青龍の代とし○西に大道あるを白虎とす。若其大道なければ楸七本をうへて白虎の代とし○南前に池あるを朱雀とす。若其池なければ桂九本をうへて朱雀の代とす○北後におかあるを玄武とす。もし一所の岳なければ檜（常正按に和玉篇檜ミナルキと訓を字鏡にナツメト訓を爾雅注に檜棗とあるに據り）二本をうへて

玄武のそなへとかくのそなへして四神相應の地とおなじく居すれバ官位
福禄そなわりて無病長壽なりといへり○秦始皇ハ書を焼儒
を坑にし時も種樹の書ハのぞくべしと勅下したりとかや○佛の
法にも代々にも神のあまくだりたまふひきよき木を樹べきたよりと
志るせし也人屋むねのいとなみあるべきことなり 以上作庭記群書類従中ニ收者 ○史記貨
殖傳ニ言植木之利ヲ云安邑千樹棗燕秦千樹栗蜀漢江陵千樹橘
淮北千樹萩(楸木也)陳夏千畝漆齊魯千畝桑麻渭川千畝竹又云
千畝巵茜千畦薑韮此其人皆與千戸侯等○大和本草ニ云吾邦
ニ植テ為民用有益物多シ木ニハ則白桐梧桐梓桃杏栗棗橘柑
金橘茶楮漆桑朴椿山茶櫧檞櫟櫚柳櫰杼數種山椒梔梨榛杉

檜樅羅漢松等也草類ハ則麻苧藍紅花薯蕷油菜紫草茜芋也。又
竹類可植者多シ○按ずるに其外猶多し。樺(シラカバ アカカバノ二種アリ)などハ多く
植べし北國にハ多し。木堅しく材となし。又皮を剥て諸の器を製き
だし。又其皮生ながら能燃雨中に消ざる也。鸕鷀をつかふものゝ炬火
把となして用ゆ。然ハ軍用にも益あるべし

草木に陰陽ある事

種樹書曰麥ハ屬ス陽ニ故ニ宜乾原稲ハ屬ス陰ニ故ニ宜シ水澤ニ。といへども稲ハ向陽
に養ひけり。陰湿にハ根を生ぜず。陰陽ともに倶ゆへ百穀の長たり。
世俗惣て向陽の地を好むハ陽性とし陰湿を好ハ陰性の草とさ
だむる。理を考ざるに似たり。孫云人参ハ陰地に生ずる故陰草なり

なれども。全陽性なり。冬に寒に傷されて向陽を悦是
天の陽気に勝ざる者あり。故に人参は陽虚を補ふ。又地黄は陽地を好めども陽草にあらず。全く陰性ゆへ旱に傷されず。寒に強く陰湿の地に傷ものなり。故に陰虚を補ふ。凡草木に陰陽の性ある事如のごとし

土地の善悪并水性事

周禮考工記曰。橘踰淮而北為枳○南方草木狀曰。嶺嶠已南無蕪菁。種之則變為芥○孔志約曰。動植形生因方舛性。春秋節變感氣殊功。離其本土則質同而効異。乖于采摘乃物是而時非。名實既爽。寒温多謬。用之凡庶其欺已甚。施之君父逆莫大焉　本草序例

○土之生物。其成數在五。故草木皆五出。桃杏花有六出者必雙仁。皆能殺人　瑯琊代醉
○按ずるに。草木は地の毛髪といへり。人も血気盛なるときは毛髪黒くして光沢あり。血気衰ふる時は毛髪脱落し。或は白して光沢なし。草木もかくのごとく。地気肥たる所に生れば常よりもさかんにして花さき実のる。諸国の名産あるも。其物も其地に応じてよく。且地気盛なる処に生ずるゆへ食物は味よく。薬種は効力他所に産するとは遠ひ。気味調ひ奇功ある類なり。又按ずるに。草木は地よりさづくゆへ土地の品を考ふる事を肝要なり。黒ぼくに好むものあり。赤つちに好ものあり。真土によきものあり。砂にとるものあり。草木各好む所あり。石斛は深山幽谷に生る草木は陽性にして清潔なり。故に多くは陰地を好む。薫穢の気を忌もの

多し。深山の土黒くなり。故に植る土も又黒くふかふかし。又海濱
に生る草木ハ陰性にして奥山の肥を好。真土或ハ沙ふかふかし。
又原野に生る草木なれバ埜土にふかふかし。そのほかの生る本に植る
事専一なり。赤黒土の品を下に志るす
○志のぶつち地鏡抄云。深山に数年木の葉くさりてつもり自然に黒土
となりたる所に又葉塚のくさりて土となりたるにハ又木の葉を土に交へ
る州ひるる。坐年ほど出せハ土となる。これも志のぶつちといふ○花
壇綱目に。赤土又志のぶつち切交て。躑躅の類又ハ木さし木に用て
妙し。是れを志のぶつちといふ○按に。年古き山なとハ。厚さ寸或ハ一尺
かどのあり。ハ一重皆此土なり。これ自然に草木の肥しとなる土なり。

是に赤土を交へて草の類によし
○武蔵野の土。地鏡抄云。巣鴨村辺より。板橋。染井。駒込辺土むさし野に
似て但し黒めなる土ときと赤めなるハ土の性すぐれ又ろち地の
竹藪と成りしさきくとえ所の黒き土あり ○按に黒めく土目黒辺
千駄木辺にもあり。黒めくの赤めなるあり ○赤土。花壇綱目に
蘭は白百合をるび類の類によし ○これハ右の黒めくの肥けあきさに
なり。然土は肥し分けはく木の類によし ○又地を二三尺もりてある
あるハ黄色なりて所く粘ぬあり生る土ハ。蝶くさり木の玉ほ用る惣て地え
さし木盆とするバよく根を生す又ねりしきて細く碎き盆栽の鉢の
底に於し入きハ水抜よく根腐せず又細ふ碎て赤土又荒土に交て

蘭蓀渓の類ハ用てよく生長す
○葛西の土ハ。地錦抄云。亀井戸辺より業平。隅田川の川筋堤など
土なく葛西の内小石交りたる所まつちなり。よくふるひてつかふへ
し。又云。真土ハ所の土より所を薄くふきたる所の土のまゝなり
たる所あるもとにいふ。芍薬によし。真土ハ水仙柑類萬菊などにおゐて加へ
てよし○按に。真土ハ石なき上にゆりきめゆり杉梨の類によし。又枇
杷をよく肥てよく生長す。但し鉢へ入の土ハ至てまつて乾き。余り
固くなりす。萬年草ハ植てよし
○八王子の土。地錦抄云。目黒辺のもまあり。雑司ヶ谷王子筋大
方此土なり。但し白めなるは上土。赤め黒めなるハ悪く小石あるべ

ふるひて用ゆ○按に。右の外又山川より流れ来る細なる砂ハ用てよし。海
河より揚たる所ハ用ゆべからず。塩けありて枯るものなり
○田土。稲を植る田の土なり。水草を植てよし。肥し土ハ鰯などを入てよし。又
自然沼池など埋て園となりたる卑湿地まて泥へなとの土なり。
小石まじりてかたよりて。或ハ乾き又ハ湿りすぎて土の性悪く。無用なる土の
ふるひなれ篩して植るハよし。林檎山査なり。又梨花梅などの類
をよし。又たゞんにおいてハ牽牛子などもことよし。菜蔬にはよし
合せ植れバ甚よし。夏など乾き所へハ洗手水人糞など用てそそぐべし。又
たまりかちなる所ハ水をたとよくして腐らしてよし
○けとふ土。根岸辺は土中より掘る。稲の根数年を経て此土となると

云。又山谷掘て土を出し別にめのとも以て土の色黒くなるまで焼く。此土を布て
つのまたを加へ練り合せ煮て佳く石の形或ハ盆の形などを作り、これへ
しのぶ石韋などの類を付てよく生長す。又石菖など植るときハ
入ハよし水を吸あげて勢のためなり

水注く事

按に。夏月園中に植木に水をそゝぐるハ日陰になりて涼しき時そゝぐ
べし。根もとへのみそゝぐべからず。地面湿るほどそゝぐべし。夕方朝ハ葉
にもかけてもよし。朝と昼中ハ葉に水のかゝる事忌む。日中に水かくれハ
土の熱気にて悪し。但し器物鉢などのへハ忽ち乾て枯るゝ事あるべし。
その時ハ根廻へめぐらせの水を葉にかからぬやうにそゝぐべし。又さし木

のある所へハむづけ節々水をそゝぎてよし。盆植の物ハ。大抵縁より下
ち土のしめり加減をよく見合せ多くかくべし。鉢の底の土まで湿りすぎ
て根くさるなり

草木吉日凶日并宜と忌との事

婁元禮田家五行巻之下涓吉類

耕作田吉日				浸穀種吉日
乙丑	丁丑	辛卯	丙午	甲戌
己巳	戊寅	癸巳	己酉	乙亥
庚午	辛巳	甲子	癸丑	壬午
辛未	壬子	己亥	甲寅	乙酉
癸酉	乙酉	辛丑	丁巳	壬辰
乙亥	丙戌	壬寅	己未	乙卯
	丁亥	甲辰	庚申	
	己丑	乙巳	辛酉	

下秋吉日宜成日收日　苗代の日に用ひてよし。世俗皆卯の日を忌む
辛未　癸酉　壬午　癸未　甲午　甲辰　乙巳　丙午
丁未　戊申　己酉　乙卯　辛酉　己亥　乙未
挿秧吉日　田うへの日によし。苗代に蒔たる日より四十九日めをいむ
甲子　乙丑　丁卯　己巳　癸酉　乙亥　丙子　己卯
庚辰　癸未　甲申　乙酉　乙丑　辛卯　癸巳　乙未
戊戌　庚子　辛丑　壬寅　癸卯　丙午　戊申　己酉
癸丑　戊午　己未　庚申　辛酉　癸亥
不收成日　丙辰　壬辰　辛亥謂之天地不成　乙未謂之
天地不成　凡播種倶合忌之

種作忌九焦日御所謂拵熊晦也　九焦日は拾芥抄の九坎日と同じ也
正辰　二丑　三戌　四未　五卯　六子　七酉　八午
九寅　十亥　十一申　十二巳
壅田吉日　田を耕すによき日なり　用火日為吉謂丙寅丁卯甲戌乙亥之類
壅田忌土鬼有九日　田を耕すにあしき日なり　癸巳　甲午　乙酉　辛丑
壬寅　己酉　庚戌　丁巳　戊午
穀米入倉吉日　庚午　甲戌　乙亥　丙子　己卯　辛巳
壬子　癸未　己酉　戊子　己丑　庚寅　乙未　壬寅
癸卯　甲辰　己酉　丙辰　癸亥
田事避忌實録　田祖即神農氏甲寅日死ス。甲主。乙巳死ス辛

亥埜。田父。丁亥死丁未埜。田母。丙戌死丁亥埜。田夫。丁亥死辛亥埜。已上並忌開田耕作耕耘。后稷癸死。専忌播種。

種菜吉日　庚寅　辛卯　壬戌　戊寅

種麦吉日　庚午　辛卯　辛巳　庚戌　庚子　辛卯

種瓜吉日　甲子　己丑　庚子　壬寅　乙卯　辛巳

種麻豆吉日　甲子　乙丑　壬申　丙子　戊寅　壬午
壬寅　芝麻忌西南風。不忌則悉変為草。

種樹書曰。凡樹木當元日日未出時。以斧斑駁推析棗李等樹。謂之嫁樹。又曰。凡果實初熟。用雙手摘則年々生果。見麝香薫則花不結子。又曰。果實異常者。根下必有毒蛇。切不可食。又曰。花果樹

如曽経孝子。及孕婦手折。則数年不著花。或不甚結子。又曰。果子先被人盗喫一枚。飛禽便来喫。凡果木未全熟時摘。若熟了即抽過筋脉。来歳必不盛。又曰。凡種花木。其傍須種葱薤之類。麝香觸也。又曰。種花薬処栽數株蒜。遇麝香則不損。又曰。鑿果樹納少鍾乳粉。則子多且美。又樹老以鍾乳末和泥。於根上揭去皮。抹之復茂。又曰。凡種樹宜在望前。在望後少實。○花鏡曰。七月鋤地最能殺草。○按に撥種撥樹擺惣て諸の草木を植るに九焦日[illegible]南風火日（暦に天火地火とある日なり）と忌といへり。○地錦抄云草木うえ蒔に毎月節より日まくべからずと暦にせつとある日なり。耕作にハ[illegible]まるさとて大よきこと不事なり。接木さし木を無用なる也。節より入剥除

其余ハ多くかゝずといへども。一同に用ゆべし

下種の事

按に土ハ草木の母なり。これ動物の胎を養と同じ。母の気血調和
すれバ其子自安し。草木も又然り。土地の陰陽を考へ草木の陰
陽に象さる所有一なり。譬ハ万年青なとゝいへる草木の実ハ日陰に生ずるもの多く。中
根の辺にあり。故に日陰に生ず。五穀菜蔬ハ陽に属するもの多く。中
にも稲の穂ハ葉の上にありて陽気を得てよく実のる。故に陽地に植
又木の類を多し其中に去るを○種を取り貯ふるにハ青あり未熟の実ある
ものあり。秋実のるものあり。何れもよく実入たる者先一本をきりて肉を剥て其の核をとる
べし。肉ハ皮に満仁ハ殻に充て硬ければ。真の実のりたるものなり。まづ一本

の草なれバ一子を採て試。一歩許なるもの一株をとりて試べし。たとへ
なき苗なれど初より採ざれバ摘とりて其種いまだ熟せざる時ハ種を実
事なり。乾燥べし実入よからざれバとりて一両日乾て湿をとり紙袋に入て
風のつよからぬ高き所に掛置或ハ箱に入貯べし。又子をとりて直に蒔ものあり。これを
とりまきと云。後に見ゆ○惣て種ハ本邦なり。形小なれども気盛
なるものハ本草にまされり。故に諸の草木みな子なる。蘇く数日乾
せずして生ずる。草ハ一附を離るる時ハ枯るゝ其気薄く忌べし。甘
蔗ハ接ずして生ず。種の生ぜざる数ハ苞へして実ハ葉の背にある
ものなり。その接種は下に見ゆべし。

○代の事　瓜茄の類は蒔に先きて苗を作るべし。まろハ一坪中にても

半坪にても園を掘ぬいてかこひ内の土をよく耕し細かにして土を
の踏たる藁を厚くしき其上に灰をしき又其上へ灰と人糞と合
せて腐したるを一寸ばかり置其上へ種を蒔て土を一二寸ばかりかき
埋べし
○種を下すハ清明天吉日を擇まくべし土ハ堆より肥しのつよきハ
悪し但し瘦地にハあらざる所を深く耕し軟にして蒔之糯粳の類
水田にまく物ハ其川の水をたくへて苗長ずるにしたがひ其所を埋む
燕子花ハ湿に蒔て後水沢に移べし蓮蓮姑烏芋藕蓮などハ初
より其所に蒔なり烟草ハ種を灰にまぜて蒔上を踏つけ置べし
又諸の種細小なるものハ細き土とまぜてまくべし風雨に動ぬやうに

害ぬやうにすべし又小なるハ種を種へ生ずるまで水をかけよし凡
種を下て西に水を灌ぐ中西の方より生ずるもの多し惣て草
木ハ実熟すれバ自然に落て生ずる理なり假令バ茉莉類けし秋頃
蒔て春夏花さき実のり収るを春蒔ものハ秋花さき実のり
収る何も其蒔時節に収るハ自然なり其より蒔ときハ種早く
枯易きものなり人参などハ実紅く熟したる時採て直に蒔土にまぜ
て其のまゝ日陰乾かし加減にして是を焼土に入て埋め置時節を待
時を考出して蒔ときは又草木の内にも多く種を実にて生ぜぬものあり
これらハ実のとりたる時直に地へ蒔置冬ハ霜雪を除おほひして
春ハ生するものあり　○種樹書曰凡果須候肉爛和核種之否則不

類其種と云り今俗に実あるもとて肉と共に植る事あれども生ずる事
遅く又腐易して悪し肉を去べし

澆灌 并 培養の事

按るに。山野自然に生ずる草木ハ実熟して自落腐爛すれバ。
則其物乃肥となる也。草木ハ葉茎繁茂し果実成熟し冬木ハ枯葉落て
左右雨露の恵を得是自然の理なり。然るに其実を採取或ハ葉茎を採
除などする時ハ理に逆ふの故に手入培養の法を用ざれバ生長せ
ざる也花鏡云。人力亦以奪天功と誠に然也。又曰。澆灌人之需
飲食也。不可太饑亦不可太飽。と云り凡草木に用る肥廿一品
あり。後に審にすべし。又人糞馬糞などの類物を煖め用る事あり。種樹

書曰。花木有不宜糞穢者甚多尤宜問用之。非其宜立槁と云り
蘭百両金杜鵑虎茨枇杷杜衡などに糞を用る事を忌が如し。又神
社の庭或ハ神前等へ作る草木等にハ糞穢を物を用ひ難きゆへ
ありかくの如き所ハ代に用る肥あり。干鰯灰汁油糟酒粕等を
合せ腐して用ハ大抵同様に肥るなり。左傳曰。蘋蘩薀藻之菜可
薦於鬼神と云ふれ水草にくさき又もの穢ハ糞汚に觸ざる
故。清潔にて神に供すべしと云意

肥土　又臓土 農圃四書 といふ拵る法ハ手に耕作さる山畑の
土を冬至の後人糞をそゝぎ寒にいてさらせ乾し。又糞をそゝぎて
乾すこと三度まで後雨にあてゝ取りに貯置春分の後日中にさらし。又

切かへまを附よく虫蟻の類。又草の根茎の類を拾捨べし。是を
さらて虫ハむれ腐て地むし。蚯蚓の類を生じて害をなす（農圃四書藝菊肥土の法也）
まれを諸の草木菊などを植るに交ませて用ゆべし

◯三和土　地錦抄に合肥と名く其法ハ野土三斗。赤土一斗。黄
土一斗。右三色よくまぜ小ふやりてふるひ。人糞一斗。煉合せ五十日
ほどねかしくつろぐまで用る。腐藁の灰又ハ糠を炒て切まぜるもよし

◯又曰南に並木いけ垣塀屏のたぐひにて山などなき陰ハ水陰さて
必冷気の地なり。一二尺を三四尺も通気のなきものハ合肥
多入べし。魚洗汁など又肥を注て草木の性のびえきつきなるもの
合肥ハ後掘く肥の理なり。又曰草花ハ惣て冬中より二月中旬

まづ肥を用べし。蟲出く用ハ却て傷差用なハ合肥を用べし。かけ肥
ハ必きろふなりといふ。接ろに生て後。かけ肥を用を忌ことよろしき。植て後
肥不足に見ゆれバ。极によりてかけ肥を用てよし ◯花鏡ニ云ベ八月草
類宜肥木類忌肥

◯溝池の泥并水　種樹書ニ云。香草などハよく糞を用ひざる
物にハみぞいけの泥なり。或ハ米泔水などをそゝぎてよし。といふ。又溝
の土を揚さらし乾てよくふるひ。石竹。牽牛子の類によし。又ハならべて土を
等分に合て植るよし

◯厩肥　まやげおひともいふ。代の内へ入る肥なり。農民おほく
是を用ゆ。其法ハ毎年人糞に灰をまぜ合せ腐し。種をうゆる時

まり、腕かく馬の踏たる藁を厚くしき、其上へ砂をしき、其上へ糞
けをそゝぎ、諸〻の菜穀の種をうゆれバ、下より温氣のぼる故へはや
く生るなり。又畑へ苗を移す時もかくのごとくしてうゆれバ、根によりて始終肥
に及ばず。又藁の代りに馬糞を用るもあり

○人糞　諸の草木は肥ハ人糞を第一とす。久しくきくる故他の肥
に勝れり。何の肥にも水を一つゞゝまぜてよし。花鏡に云、正月七分糞三分
水。二月六分糞四分水。三月對和。四月四分糞六分水。五月三分
糞七分水。八月四分糞六分水。九月對。十月六分糞四分水。十一
月七分糞三分水。十二月八分糞而止。○地錦抄云、人糞一桶に
水二桶入、五十日ほど置く。青き水のごとくになりたる時用ると云。

按に、うけ肥ハ、雨後晴たる時よくうけて、雨降ざる日にくよし。むかし肥
を人入るゝにハ水を匙にて剝たるがよし。何も人糞ハよく腐たるがよし。生なるを
今俗に傳ふ寒肥と云て、冬の末に春のはじめなど用るハ至てよろし。譬ば
無たるごとし。冬中ハ蟄して陰氣あれど、春陽氣にあつて陰をおさむ。
草木も又此のごとく、冬ハ寝が如し。春に動て陽を含む時ハ寤るが如し。
此時肥を用ハ、渇きたるに水を與ふが如し。大抵芽を出る前に用べし。
弱き草木などに寒中強き肥を用れバ、却て傷腐ものあり。但
木の類ハよし。又植かへて直に肥をそゝぐ事悪し。若用たくバ肥に水を
多くまぜ植るよし。根づきて後肥を用べし

○人尿　菘芥は殊に用ゆ。よく腐して用ゆべし。種樹書に云。

瑞香なども温を嫌ふ。根のもとに蚯蚓ある時ハ害あるゆゑ。此時小便をそゝげバ
みな悉く死るなり
○鰯 和名 又鰮魚と書 鰮をもいふ。肥に用るハいわしといふ。ごまめより
大なり。おほきなるも田作るも皆用てよし。地錦抄に云。水に入て壺
くさらして下肥に用ゆ。大方ハ干てまきてよし。花壇綱目に下肥にいたむ草木に
用べし。よく搗粉にして用ゆといふ。按るに。干したるハ臼にて挽粉にしてよく
用ゆべし。然らざれバ鳥獣此を食ふなり
○洗魚水 地錦抄に云魚洗汁ハ鉢物にたゞ四五日ほどづゝ用べし。
魚の腸ハ久敷くさらして用ゆ。花壇綱目に云根に肥の入ぬやうに其木の廻に用ゆ。
諸草ともに根まハりに少し用ゆといふ。種樹書曰。月桂花葉常若

蟲食者。以魚腥水澆之乃止。又曰種香菜常以洗魚水澆之。則香
而茂。○地錦抄云南に日陰なれバ纔日乾干ハ熱地なり。魚の洗汁を
おへらすしておしづかにかけたるハ陰気ぬけまして土ま温をやきてよし。合肥
油糟など魚とぞ乾き植物枯るゝものなり。又石の如なる赤土又ハ焼土おほく
などにて。焼土ハ川土である時ハ一二尺も土の性なし。芝なども土なり。魚洗汁
などにてまづなどにて。土気補潤たるがよし。焼土ハあまり性なく虚なるにて
ハよき肥ハなくなりて悪し。魚の汁ハ時々かけ。米泔わら灰などそゝぐべし。又
石砂多き地ハ実地なり。悪土多く切まぜて魚洗汁など肥鰯肥
油糟等の類ハよき肥ハ悪し。そゝぐ。肥るを見るハ必種物いたむ。
地肥たると見ハ肥無用さるべし。此見合第一なり

○灰　竈又ハ火爐の灰も人糞ニ合せくさらして瓜類
茄麦粟黍稗等の肥ニ用ゆ。花壇綱目云山慈姑青らん水仙等ニ
藁灰を用ゆ。其外くだし把ニまぜぬらして用ゆ
○酒糟　酒かすニ籾糠を切まぜ団子のごとくに拵貯置春ニ
成ニ水ニくさらし人糞を合せ稲田に入てよし。又葡萄などの
蔓長く出る物ニよし。又松の勢悪きニ根廻りへ入て又蘡薁をるなり
種樹書云。種藕以酒糟塗之盛
○油粕　胡麻の油粕よし草木の葉の光沢をよくと花ニ蘭ニ
らんニ用てよし。花壇綱目ニ云荏の油糟ハ牡丹芍薬の類ニおとつて用て
よし。但秋冬あまりあり

○膨蠶　夏の内よくくさらして句くなりたる田畑へ切まぜ八月ニ
蒔く麦をよくなり
○米泔水　米をとぎたる水なり蘭百両金まんりやう砂根紫金
牛茶等ニ用てよし。又香氣ある草木ハ清泥水ニよろこぶを合せそ
ぎてよし。又溝渓の溝の土乾て篩ひ植る土ニ交用てよし
○糠　炒て人糞にあせ用ゆ。籾糠ハ酒粕ニ人糞を合せ田の
肥ニ用ゆ。又めみぬかを孟宗竹の根ニ置くよし
○豆腐　豆腐の滓ニくさらかしなりよくくさらして用ゆ土のせて
又肥土となす
○馬糞　花壇綱目云。寒氣よいこむ草木ニよし。又暑氣を嫌

草ふと根よりへ置べしといふ。又牡丹の根まはりへ冬の内多く置てよし。
る蘗花ハ多くハ用ゆる花勝へ置べし　○馬尿ハ花壇綱目云人尿とおなじ
和なり諸草にまぜて用

○獣肉の類　涅盤經曰如下橘得レ鼠其果子多と云り。鼠を人
糞汁に漬置くさりて浮よる時柑類の根へ埋る時ハ実多し又猫狗肉
牡によろしきものなり。物類相感志に之あり。其外諸の獣よく腐爛さる
時根より一尺へ埋てよし古き皮の類もよし

○牛糞　桃を植る時牛屎にを糸まぜ埋置。其土になり植るてよし

○羊屎　立夏の前羊屎を泥に合せ蓮を植る時ハ花多し。
花鏡云報春先用二羊鹿屎一和レ水澆又暑月澆二冷茶一

○猪糞猪尿　種樹書曰木擇當用二猪糞一又冬青樹凋瘁以二猪
屎一壅レ之則茂一說猪澇灌レ之又曰凡種花欲レ得花多須用二肥土一秋
冬之間壅根春来着花自然盛。以二猪尿一和レ土令二發熱一為二肥土一。

○鶏糞　種樹書曰鶏屎壅二茉莉一則盛壅二百合一則甚滋生す
りよ今も烟草燈心草龍鬚等の肥に用ゆ又菊撫子等の肥に
まぜ用れハ花の色よく生ずるの如なりむ雑の糞屎皆よし

○介類　蛤蜊文蛤其外諸介類捕へ多く入漬置腐さる時
殻をとり揚其を紙用ゆ松に用てよし

○塵埃　燕子花石菖萍蓬草鳥芋慈姑等の水草に入てよし

○茶滓　暑氣にいろむ草木の根へ置てよし又て蘭類に置べし

○草綿子　桑の根邑へ入又緒木の根へ入てよし又油を搾たる粕も用てよし

○梳頭垢膩　たらんく又ふけ等も根邑へ置くよし

接法 并 図

燕居筆記曰接法有六曰身接曰根接曰皮接曰枝接曰靨接曰搭接○農圃四書曰桑二月而接也有插接有劈接有壓接有搭接有換接○葉世傑草木子曰植物去皮枯気在外也動物敗内死神在中也 大和本草 ○張約斎種花法注云春分和気尽接不得夏至陽気盛種不得立春正月中旬宜接桜桃木樨徘徊黄薔薇正月下旬宜接桃梅杏李半支紅臘梅梨棗栗柿楊柳紫薔薇二月

上旬可接紫笑綿橙區橘已上種接茎於十二月間沃以糞壌両至春時花果自然結實立秋後可接林檎川海棠黄海棠寒球轉身紅視家棠梨棠海棠南海棠以上接法並要時將頭与木身皮對皮骨對骨用麻皮緊緊纏上用箬葉寛覆之如萠出相長即撤去箬葉無有不盛也○柑橘橙等於根棘上接者易活○接樹須取向南偏下者接之則着子多○梅樹接桃則脆桃樹接杏則大○凡接花木雖已接活内有脂力未全包生接頭処切要愛護如梅雨浸其皮必不活 以上種樹書 ○接ハ農政全書に接換又審なり本邦ハ接樹多くあり甚木によりて附接のよき附接べし何れも九候南風天火地火への日を忌べし先その接砧の木ハ三四歳より六七

歳ばかりの木ハ勢よし。又四五歳といへどもあまり老たる木ハ悪し。十歳餘の
木にても勢よきハ又接べし。大樹へ接ときハ枝の勢よき所を残し、餘の
の枝ハ皆截すてゝ、その残りたる枝へ接なり。是をえつぎと云。又砧樹を
抜て接時ハもちろん根を切たるもよし。又切る時ハいらざる根をのぞき、接穂の所ハ
去年のびたる所を一年接なり。所ハ長くのびて勢よく、肥たる所を切
とりて接なり。又弱木ハ接たる所の枯ぬ内にきるべし。葉までかきとり、又
出る芽もかき入置なり。風を忌べし。又接てから、其の切口と、穂の切口
蝋或ハ黒脂塗とよし

○換接　又根接とも云。則ち根つき接なり。仕様ハ先の所大根の
切口をさし、截ハ木にいけ置。砧樹とまり、其切口の継め所、小刀にてけづり

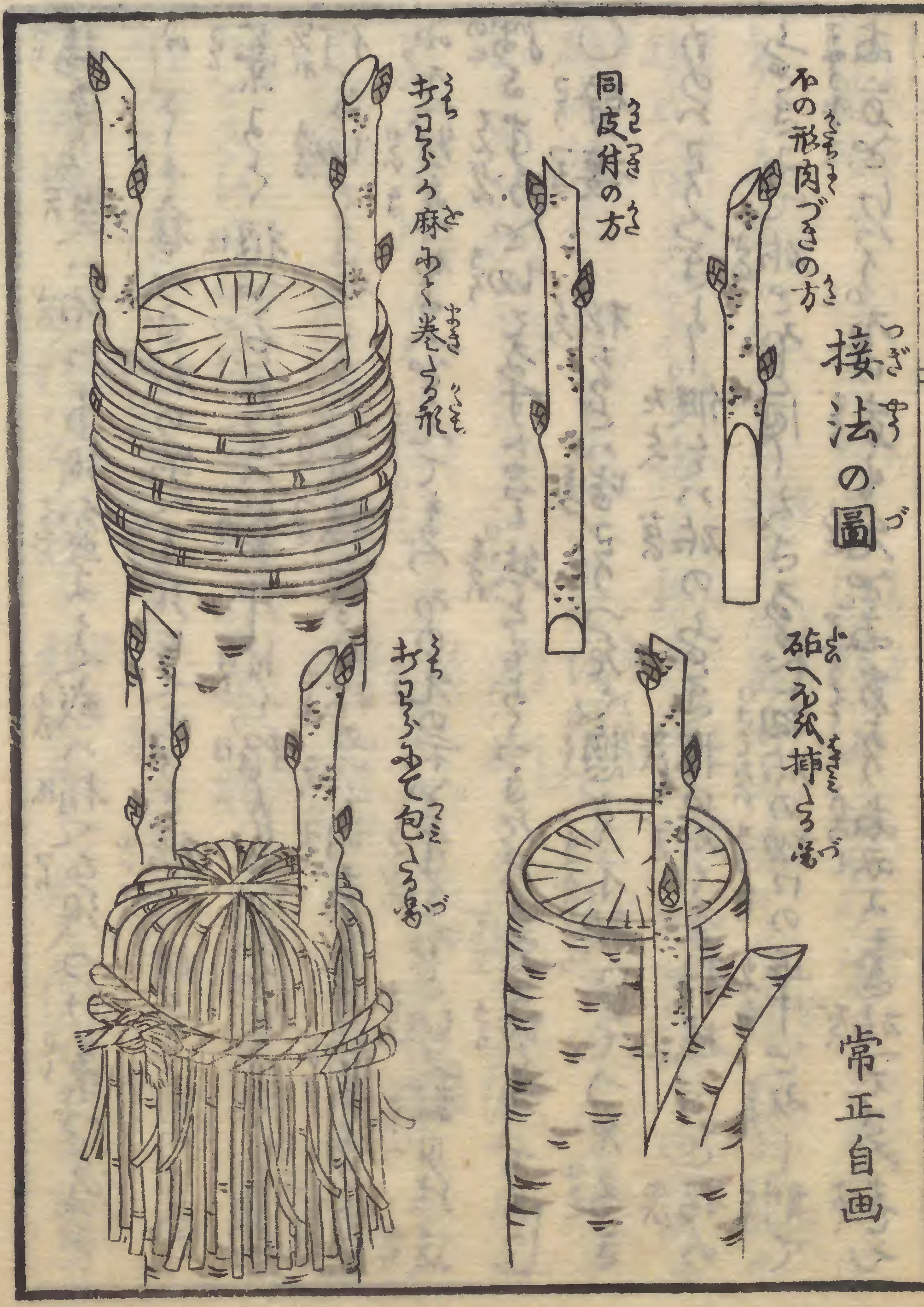
入置て四五町程の所へ持ゆき接べし。但し木口より水けある木ハ水より接て
よし。其砧の木口片方より木の心と皮との間を竪に小刀にて一寸程
けづり捨るなり。むべくれ甚かげんあり。木によりて皮の厚きものあり。
薄きものあり。又大木ハ厚く、小木ハ薄し。若薄き皮と厚くけづりて
木の心に小刀かゝる時ハつがざる時ハ接口を細くけづりあてべし。
極て細く二つ三つにかけ、二寸程よきにより、其の皮と心とまじらぬやうにすべし。
竪にけづりて、足へ合せ、砧のへぎめ一寸ならバ所ハ一寸一分程にけづる
なり。外の方の皮より、そろそろ切捨て、そのけづりめの長き方を内にして
砧へさしこむなり。其砧の切口より、穂のけづりめ一分ほど出してさしこめバ
手際よし。砧の切口へ肉あがるなり。砧太ければ二口も三口も接べし。接

もし上に打葉ありとも。水きる麻などにて。雨の動ぬやうに巻なり。尤
あらせめのすかぬやうにおくべし。打蘗なればかたく巻。麻などにてくゝ
かたく巻てハ悪し。ゆるく巻バ。木のびるとき肉のあがりかたし
悪し。然ども桜砧梅砧などを砧とらバかたまきハつぐとも。本のまゝにてよろし。
桜砧の木口よりつぎめの両紙。打こみふかく包。又紙にて封ずる法もあり。
もし上に竹の皮にてよくさゝへぬやうにおほひ苗をふせべし。又多く
を数百本も接ときハ葉ふかく包たるまゝにて。其の先をおし土の上に出し。
皆うづめえて低く平に蘆づをかけ。又圍をあらくかこひ風雨紙
ふせぐべし。接の勢気をたもてるためなり。紙にて包たる所へ芽を生ずるとき
ぐるぐる紙だんだんにさくべし。桜を接たる所へ桜の所を見よくかこひく

鳥獣をふせぐべし。風を損ぜざるやうにかこひ。砧より芽を生ずれバ。早くか
きとるべし。たとへ多く出るハつぐとも。又それより芽の生ずる所ハ見合竹の
皮にて切去べし。接樹ハ夏の土用をすぎて。秋又春にかへてよし
○高接　一二丈も上の枝へ接なり。多く枝の垂る所を接。其法
ハ右にかはる事なし。但し砧の切口并に其のかはとねたるめに接さる所へ
割竹か又篠の類にてかこひ。其内へ土紙入をとおし出し置こと也。
木紙にて包なり。是を漏斗といふ。又竹の皮の内へ土紙入。其を植置ハ
日をよけて潤なり。又竹の皮の外へ木の枝を添置て。鳥の止る所
ふせぐべし。又砧芽をかきとるべし。又枝ごとに多くて接紙枝接といふ。
是つぎはけなり

○壓接　仕方ハ切つぎの所に接てよし。又葉を生ずて其葉なく
ありて腹接もよし。又よび接にハ時節なく。四季ともに接るものあり。何も
接方ハ同じ事也。まづ其接べき親木を撓ひ伏て種枝の地に近き所に
砧木をうへ其枝をよびて木を少し切取りて接なり。但し砧の皮を
なぐ事ハ。小刀を下より上へけづり。皮ハ捨るがよし。枝を寸法ぐらいに
其の皮を少しそぐなり。薄くけづり合せて接之。跡の半分入るなりのごとし
○身接　是ハ夏など接に砧の切口より。一寸も二寸も接
口をさげて接なり。夏ハ木の勢よく枯ぬるゆゑなり。百両金
大山きんげなどの木の類皆腹へ接なり
○皮接　これハ木にする親木なるへかぶりしてまた筆にて

接なり。是ハ砧の本紙をまう之或ハ根へも紙つけ葉づとのごとく
包み。其接べき枝の所へ本紙を又あてて結付け。はらし封つぐるなり。
葉ありて根を包むるハ。寒中日にて。根の上水をそぐべし。又
何も切たる手にハ夏接たるは枯の皮肉あがりて砧木より十分
に。又ハ勢気がよくなりてまづ其の元の所を切取るなど切。又数日後
のこるまたを切たる手なり。然どもよくつきたるハ一度に切てもよし
○劈接　松などハ皆劈つぎなり。惣て木軟にしてつき易き
ものハ劈つぎよし。假令ハ砧の先き指の如くなれバ接木を指の
ふときにて。砧と同じ太さなるほど。扨砧の切口の正中を少し割て。
其方をけづり。其方も元と其方より其外にそぎ。砧へはさみ差込


接法の圖
丙の形肉づきの方
同皮付の方
打コロへ麻にて巻る形
砧へ入て挿る図
打コロへにて包る図
常正自画

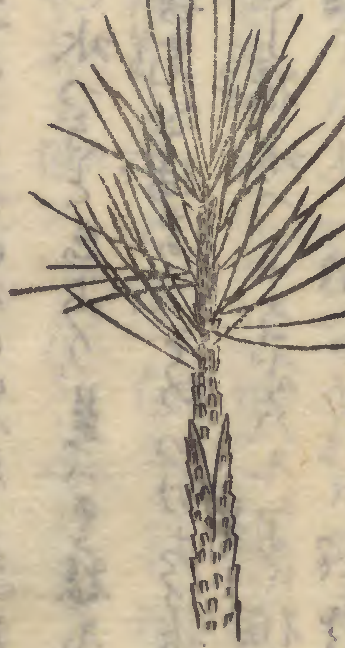
高接を漏斗に仕かける図
身接の図
根を砧にて接る形

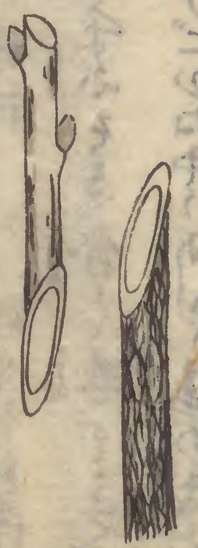
壓接の圖

よびつぎハ親木の枝を撓て其木のよく砧へて枝よりまづ添木の枝おして結付おきそあると
接木の砧の皮ハ切とるうちよくよし其の方ハきり接の如く砧よくくらぬやうにし
削合て接なり

春接なるハ秋ふなりて其間をまず其の方をくるるみへふ。よく
つきたると見えし先づ小刀
ふて切つけ其二三十日を
経て。おのこなんずん手切を切
たるすべし

劈接の図





搭接の図

水つぎの図

挿接の図

○搭接　砧も木も同じほどなるを。砧をそぎすまそぎ。又木も
むすびそぎ。合せ巻まく之割竹にて竪にそへて上を土にとおき。
うごかぬやうにして。接めまで土をかけおくなり。牡丹を接るも此法也

○插接　是ハまづ根を接べき木の枝長く切て撰をさる頃に
ちくさして。その木の先端より接の本をよく接なり

○水つぎと云あり。是ハ木を接木の元末を入て插花の如くにして。
甚先を接なり。そのいけたる水ハ二日ぐらゐに入替てよし。右
さし接水つぎなどハ木のよく枯るゝ疑ひなきたびひみてよくよび
接ふとなし疑ひなきものを接法なり

○根接　根を砧としてよく接法あり。是ハ砧にする木を掘。木の根の際

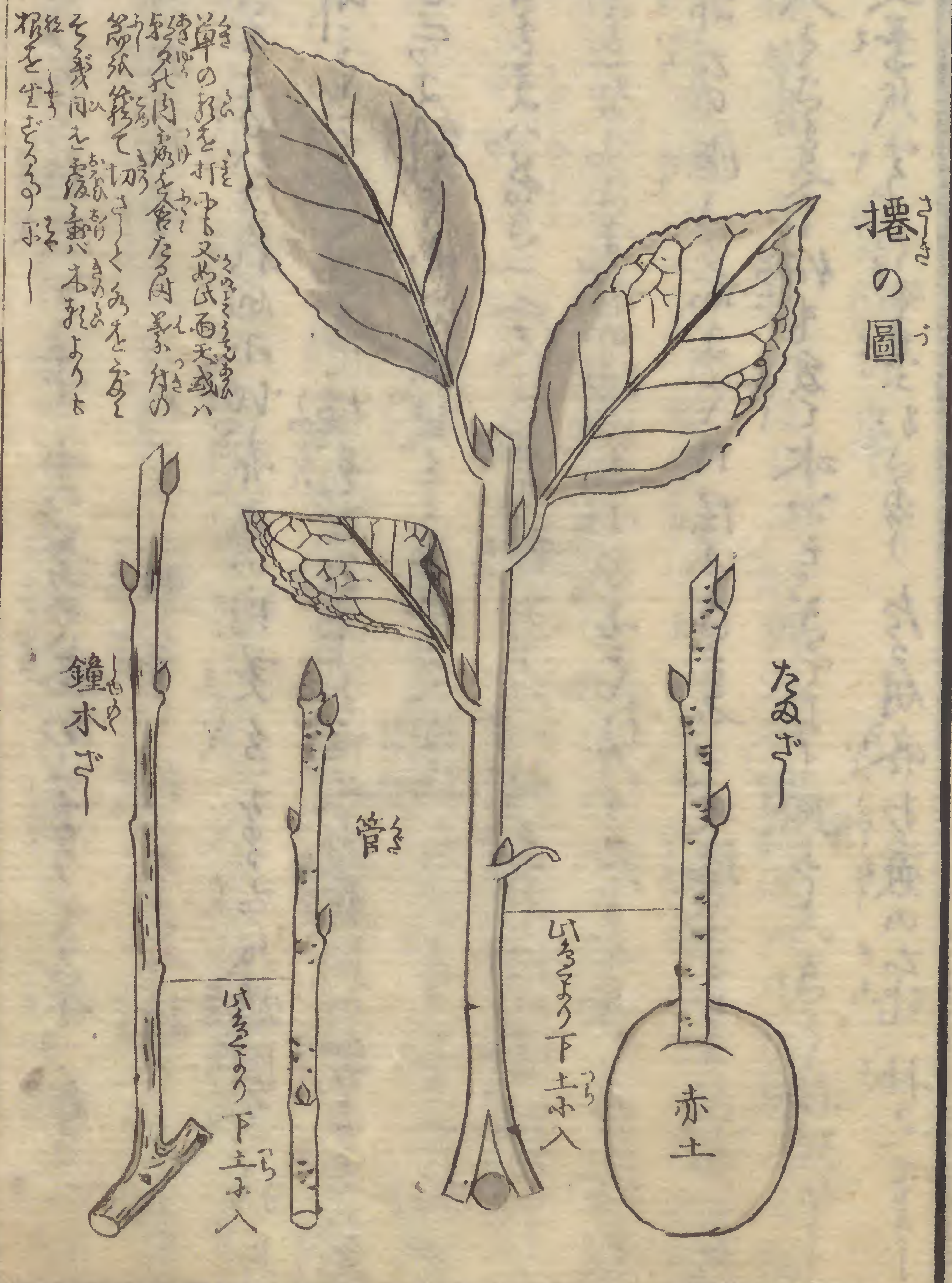
よく皮のきれぬやうにする也。切口ハ土にて砧の如くよく接
なり。大木一本をかれば砧木数十本を得べし。惣じて根へ
接ば土がふかく置く。土中の水気がよく接べし。又
強き木なれば但一本ならず外に砧となる木をなほければ
その木の根を切りて砧としてつぐべし。臘梅連翹などは根
より芽を多く生ずるものなれば常の砧木の如くしてつくべし。
根を砧のやうに接べし

撰附り壓條の事

種樹書云凡種花木須冬至後立春前斫直接有鶴膝如大母指者長二尺許扎千芋魁中掘令寛調泥漿細切生忌一束攪於泥

中以細土覆之勿令實當有花次年結実○農圃四書執桑之條
曰耨地而糞之截其枝謂之嫁留近本之餘尺餘許深埋之出土
也寸焉培而高之以泄水墨其瓣或覆以螺殻或塗以蠟而瀝青
油煎封之是防梅雨之所侵糞其周圍使其根四達若直灌其本
則韲而死未活也不可灌水灌以和水之糞二年而盛○花鏡曰
八月藤本者皆可扦活○接ふ扦挿の仕方ハ二三月さすもの
ある或ハ梅雨中さすものあり又秋さすものあり。其内 枯
雨中にさすものを多し。さすもの八大風又俄でりの日を
悪し。雨後晴したる日を窺ひ日の出ぬまへ巳の刻までのうち
さすべし。又さすに枝ハ挿る時ちらく芽の出ざる前又ハ年

墢の圖



のびたる新枝をさすなり。葉の茎かゝまりてさす。長さ二三
寸位に切。葉多けれバ二三枚置て残ハ大さ捨てよし。む
さきを方八寸ばかりに切。赤土の内黄色なる土を練團子にし
かこ。其土へさして植。是をさしと云。又山茱萸の堅き木ハ元
を二ツに割て小石を挟こむべし。又拇指ぐらいより太き枝を
さす事ハ。長さ一二尺に切て。枝あらバ一枝置て残ハ皆切捨て
さす事なり。さす所の切口ハ。小刀にてけづりたるよし。其さす地ハ
赤土の湿る所よく日陰にさすべし。又鉢へさすとも赤土を
入てさすべし。何れも度々水をそゝぎてよし。根よくつきて根を生じ。
又葉を生じて葉かゝまりたる所。各お庭の土地へ植えてよし

壓條の事

種樹書曰。凡接矮果及花。用好黄泥晒乾篩過。以小便浸之。又晒
乾篩過。再浸之凡十餘度。以泥封樹皮。用竹筒破兩半封裹之。則
根立生。次年斷其皮截根栽之○按ニ花鏡ニ過貼とも云り。其
法ハ種樹書ニ説ところに同じ。牛羊糞を交入と云て。惣てとり
木ハ。木の枝よき所に疵をつけ。たわめて竹を添。其所を結つけ。土を
うけ埋置く。土乾バ水或ハ人糞へ水を入薄くそゝぐべし。其
疵の辺より根を生ずるなり。其根出てよく入る頃枝の元をきり
其後外へ植かへてよし○又枝ふとくしてたわめがたし。又枝高く
して地に埋がたき所へ。ふとき竹を割て。節を一ツ留て筒に切く。

二ツに割。楔をさし木にせむと思ふ。枝の皮に少し疵をつけ。そのきず
の所を右の竹筒合く縄にて巻。赤土の粘りある土へ肥土をまし
まぜ合せたるを竹の内へ入置。土の乾ぬやうに苔をつけ
或ハ小草を挿べし。節にわらそゝぐべし。根の生ずる比を考て竹
をとり。初疵を付たる所より下の所を生たるも切りて置。又竹を合せ。
木のごとくにして置。いよいよ根のよく生じたる時。地生たるを切おろして。
大鉢のなかへうえかえてよし。又ふるき枝をとるならば。地の空たる枝を
通じの内へ土に肥土をまぜ入て。右のごとく切たもよし。又小枝
なく或ハ木の根もとにある枝をとるには。桶を入土を入るもよし。
又木によりて根までかれるものあり。其木の芽の生ぬうちに。根もとを

壓條の圖

諸木如此竹の所へ少し疵をつけ土埋或ハ竹をわり或ハ藁にて土を包。下げおけバ疵の所より根を生ずるものなり

あり根を切たるを切口を土の上へ出し置。よく肥たる土へ植置べし。
数日をへて芽を生ずれど。是ハさし木ぞろ木より丈夫にてよき仕方也

移樹の事 附り 伐木事

淮南子曰。夫移樹者。失其陰陽之性。則莫不枯槁。高誘曰失猶易 ○齊民要術曰。大樹髡之。不髡風搖則死 又曰。植樹。正月為上時。二月中時。三月為下時。○種樹書曰。凡移樹不要傷根鬚。須闊垜不可去土。恐傷根。諺曰。移樹無時。莫教樹知。○又曰。今移樹者以小牌記取南枝。不若先鑿窟沃水攪泥方栽築。令實不可踏。仍多以木扶之。恐風搖動其顛則根搖。雖尺許之木亦不活。根不搖雖大可活。更莖上無使枝葉繁。則不招風。種一切樹木枝向南。栽亦向南。凡樹要移當三年一樹得拙而枯。然未可一槩論。若以桂為下在下釘則枯。在上碪則茂。種樹木用穀調泥漿水。於根下日沃水無不活着。凡花木有直根一條。謂之命根。趂小栽時便盤了。或以磚石承之。勿令生下。則他日易移。○按ニ。大和本草ニ云。植かへハ宜き時を背べつきぐて。つかれても栄ず。大抵木をうへかえる事ハ常木ハ春葉いまだ出ざる時。正二月に宜。秋葉落て九十月よ宜。落葉木ハ春葉出て。よく固まりて後に五月植べし。とらふ木ハよろしくべし。大概春の初植べしとも云り。地錦抄ニ云。不然も。又此のよし。凡木を掘とらむ心得あり。先太くありたる根あらバ。根を切鉅にて切よし。鋤鍬などにて切バ根の皮爛る故植ても後くさる

なり。若年久しく居住きたる大樹ハ。根粗く鬚少ク人なりち悪し。二三年前時節よ先附根を片々掘切置し。枝を切詰るに二年めに。又片々を切置し。まづ其元へ植直細根を生じて後植移てよし。是を轉探の法といふ。大木ハ枝をなるべく切てよし。方角の向ハ違ぬやうに植る法あれども。植所によりおなく向の違ふもあり。一概よりも云がたし本ハ植るに是。初より二三寸も淺く植る仕法よくよし。初より深く植れバ必傷あり。植る法ハまづ川。根の形より大きく掘柔き土を下へ敷甚ふえ樹をも入根の周りより細き土をさらくとふりかけ。細き木の枝にてよくつき廻又土をかけ。木まで根の下までその行とき ゆらつきこれなく水をそそぐべし。又右のやうに細き土を根足入へ作り

木よくつきるなり。水をなるべく流さぬ時ハ土かよく根足へ引入るなり。是を水かんと云。いかなるも植しまふに。その芽の丈夫なる木へ植る樹より竹抔渡縄にてしかと結置べし。右結所ハ竹へ疵をつけてよし。竹ハ随分撰ておろし。節遠ぬ竹を直に結付てよし。竹ハ二本づつ十┼如此かくのごとく竹を渡すべし。植て二三年の内ハ葉などか乾たる時ハ水を度々灌べし

伐木事

禮記月令。孟春之月禁止伐木鄭玄注云為盛徳所在也 ○周官曰。仲冬斬陽木。仲秋斬陰木。○齊民要術曰。伐木四月七月。則不蟲而堅肕○花鏡云。十二月伐竹木不蛀○按ハ。木を切ニハ葉木すて林檎枇杷李の類ハ二月わか芽の出ぬ前よし。小枝ハ小斧或ハ鎌の類にてよし。

皮の損ぜぬ様に切べし。又鋸にて切るときは小刀にてけづり、切口へ
蝋或ハ番紙など油紙にて包て置べし。冬木にて芯ゐ
かし。もちの木ハ二三月頃切べし。諸木皆暑中と寒中に切を
忌。○田舎にて。合抱よりある木なれば切口へ酒を備ふと云

盆鉢の事 附り 養花挿瓶の事

按に、盆栽ハ土乾きと湿ずよく下へ水の抜るをよしとす。陶盆にても
又花盆なども水抜の穴肝要なり。其穴ハ漏斗の如くおほきなるをよし
なきなどよし。なきと穴の所内へ引込たるハ、早く水滞て悪し。穴の所へ紙が
よし。扨穴を覆ふに、何の瓦器にてもよくさき。ものにて穴を覆
べし。又蛤などハ鉢によりて水抜悪きなり。花鏡に建蘭を植る法

に云。用盆先瓦片填底、後以煉過土覆上と見れば妙法なり。蘭百両
金なども鉢へ植る時ハ、盆の底の穴を大きくして上を覆ふに赤土の
荒きにてよし。かくすれハ下なる土流れくだることなし。植師ミなしかする
粗なる土を入て植るべし。水よく抜て根腐る事なし。鉢によりて植る之合肥を
切まぜるもよし。総て植る法ハ、まづ陶盆を下に置、植木の根元へ
ゆるくなるべく高くかりにおりて土をさらくと入、土一盃になりたる時。
前後左右へ揺動べし。土の空虚のなきやうになり。植て一両日水を
そゝぎ、或ハ大雨に逢するを忌。土のかたまりて悪るなり。肥を嫌ふ草木へ
年と土ハわらにて入替てよし。又肥を好む物ハ、土の乾めなる時先、土
を箸の様なるものにて和げ置、よく移したる肥を根もとへそゝぐべし。

又鉢植を地に置く久く居つく時ハ。水抜の穴より。蚯蚓升りて根の内にすむときハ必湿てつひに根腐さるゝ事あり。常に置ならバ然るよし。又蚯蚓を去法ハ後にいへり。又蘇鉄松の類ハ棚にのせ置くをよし。蟻の付事あり。又たとへ蟻なく共用心すべし

養花挿瓶法

秘傳花鏡云。凡花滋雨露以生。雖瓶養亦當用天落水。毎日漆換其閒庚久。若三四日不換。花必零落。莖必乾枯。毎夜宜擇無風有露處置之。猶可多延一二日之鮮麗。此乃天與人參之力也。折花之法。不可亂攀。須擇其木之叢雜處。取初放有致之枝。或一二種比枝配色不冗不孤。稍有畫意者。方剪而燔其折處。插之則滋不

下洩。花可耐久。蓋有不宜清水養者。又不可不察焉。如梅花水仙。宜鹽水養。而梅更宜醃猪肉汁。去油俟冷插花。且瓶不結凍。雖細莖皆開。若貯古瓶中。常刺以湯還。能結子生葉。海棠花須束薄荷葉於折處。再以薄荷水浸養。細莖盡開。梔子花折處須搥碎以鹽入瓶中。乾插自能放花抽葉。花謝後鹽仍可用。牡丹初折卽燃其皮。不用水養。常以蜜浸自榮。謝後蜜仍可用。芍藥燒枝後卽插水瓶中。夜間另浸大水缸内。早復歸瓶。則葉緑花鮮。蓮花先用泥塞其折孔内。再以髮纏之。先插入瓶。後方灌水。夜置無風有露處。則菡萏皆開。芙蓉。竹枝。金鳳花。皆當以沸湯養之。衆熱卽塞瓶口。則花易開而葉不損。若蜀葵。秋葵。芍藥。萱花等類。宜燒枝插。餘皆不

可焼。凡貯瓶中水。須焼紅瓦片投之。則水不臭。冬月将濃灰汁和酒。灌瓶内則不凍。鮮肉凍汁養山茶臘梅。則開耐久。如瓶口大者。内置錫管。冬月貯水不碎瓶。若小口膽瓶等。投硫黄末數銭亦可免凍之患。○種樹書曰。催花法。用馬糞浸水。前一日澆之。三四日方開者次日盡開。又曰。冬間花瓶多凍破。以爐灰置瓶中則不凍。或用硫黄置瓶内亦得。又曰。芍薬牡丹摘下焼其柄。挿瓶中。後入其柄以蝋封之尤妙。○古来菴の挿花水揚の傳書に云。河骨ハそのまゝ活てハ半日も持がたし。先切たる花葉ともに水に浸。絹水紙あげたる日揚て。軸の葉つき際より後の方を。小刀にてたちこゝろにて葉のかよふ所にして。葉づき際へ山椒か麝香を少し挟む

低く活べし。花ハ花首へ竹串さし抜。水氣を通すなり。又末へ硫黄さしてをよし。萩ハ朝日の出ぬ内切べし。捻紙焼て花首へ酒を吹べし。末へを酒をかけてよし。又日中に切て活るならバ。枝を焼熱湯へ活べし。二月ぎりハ持ものなり。竹ハ朝日の出ぬ内切べし。捻紙にて巻切。葉紙二ッ折抜。末へ唐がらしを其まゝ入葉ともに養てよし。寒竹などハ折ん養ふべし。勿論葉なき氣條などへ。水揚ず指て目立ぬものなれども。水引渡折べ生花の甲斐なきまじ。能く知るべし。木賊ハ節を細き竹串にて抜。肴より水に養べし。是をさして目立ぬものなれども。ケ様のものにまで一ッ紙つくべし。又かきつけある事をよしと傳書に見へ也。牽牛花ハ早くよりさき落る也。翌日開と

切かへ蒼朮。青に切く蔓葉ともに。水十分に漬置て宜し
たる紙活べし。随分冷き水よし。朝顔の内ハおゝめなり。旋花ハ
活むと思ハ一夜まへに。蔓ともに切。水完器ハ大桶へ漬置よく水を
吸せて其花の蕾ざかり活べし。甚よわき花なり。然を蕾て六中く
生付もよほど。阿河骨ハ菜の花の類。日の出ぬ内切く。京だく之方を
吹巻て活べし。油を剥く亭子紙ふたをなみて活ハ能よし。秋海棠ハ
油の節を槌ふくうち臥志なぎ萃に漆まで水よ養置て活べし。
随分燗たくのおよし。若紅葉ハ朝早く切く。氷ハ本通の稲を
入養て活べし。秋の紅葉ハ。桜木の性よわきゆへ。折口を割木
通とをそのまゝ。糸だくへ石紙此水をべし。へ麻せ置活べし。此上水養の

あまり紙をつゝむとよし○桜ハ草木ともに惣て。日の出ぬ前よ
切て其まゝ生る用ハ。よくたゝめるものなり。挿花の事ハ。瓶史にも頗
委し。素考べし。竹などハ甚むつかしく。或伝に塩水に養置活べ
よくおもとよろし。其外種々ありて家々の秘伝あり

除蟲法 並圖

種樹書曰。種木無時。戴毛蟲於根下。皮以甘草末擦之亦佳。又曰。
臘月二十四日。種楊樹不生蟲。又曰。斫松樹五更初斫倒便削去
皮則無白蟻。又須擇血忌日以斧斂之云。今日血忌則白蟻自出。
又曰元日天未明将火把於園中百樹土。従頭用水燎過可免百
蟲食葉之患。又曰園圃中四旁□種決明草蛇不敢入

江南又蛇賊门草とも云。此草流球より来る。流球は蛇多し。此草を植て蛇を避ると云。流球にてハブと云といへり。云如の決明草ハ本草綱目の決明なり。是もハブ草の類にて形葉相似て故に名く。決明草もまた蛇を避るといふをあるべし

又曰。濯洗布衣灰汁澆瑞香。必能去蚯蚓。且肥花。以瑞香根甜灰汁則蚯蚓不食而衣垢又自肥也。又曰。栽樹為虫所食取蟻窠於其上則虫自去。又曰。果樹有蠹出者以芫花納孔中。即或納百部葉。又曰。果木有虫蠹處以杉木削小丁塞之其虫立死。又曰。生人髪掛樹上。鳥不敢食其實。又曰。桃李蛀者以煮猪頭汁冷澆即不蛀。又曰。果樹生小青虫。虹蜻蜓掛樹自無。

○按ずるに白蘞末置花根下。辟虫易活。凡樹をうへかゆる時根の下へ大蒜一つ甘草少ばかり入て植ハ久く虫を生ぜずと花鏡に見へたり。凡草木に生る虫甚多し。其内大に害をなすを虫をこゝにしるすべし。

土中に古根残るなどあればば虫を生ずるゆへあまざ紙を書て挿入る。風気入る故よきれバ虫出し。木の枝ハ古枝を切とり風を入べし。又挿へ烟草の茎を切まぜて用バ虫生ぜず○黒小地蚕又芽きりむしとも云。其形のどむしに似て小く泥色なり。早春の頃土中に居て朝など出て草の芽を食。よく見て殺べし。又土中に蠐螬あり。此類ハ皆草の根を噛切ものハ忽枯る。甚害をなす。根まはりの土を紙にて巻て植べし。虫多き所ハ石灰を水にとき澆バ死す。又石灰にてそゝぎ去べし○木蠹虫ハ形長く色黒し。林檎無花果などの木の心を食。皮の所へ小き穴をあけ。鋸屑のごときものを多く出す。此穴へ硫黄を粉にして入るよし。又針金を穴より入て実殺もよし。又縫

炮の焔硝を捻紙によりて其穴へさし入て火を付れハ忽穴の中へ火
通じて虫ハ死す。又虫の穴へ鳥油をさしてよし。此虫諸木
に付ものなり○草木ともに風入あしき所ハ木蠹又ありまきとも
いふ虫多く葉の裏へ付日にあふてひしとむらがり芽を枯す
なり。右何ハ虫の聚り居る所へ烟草の茎粉を多く焼てよし。又鰻鱺の
骨を焼て煙てよし。又麦藁の灰をふりかけてよし。又常の灰
にても多く振べし。あぶらむし生ずる所ハ蟻多く聚り虫をかふを取
蟻を払捨べし。又鼈甲をやきて其香ハ蟻集るを見て持行て払べし。又
砂糖を其蟻を聚て取捨もよし。花鏡に云蟻穴以香油或羊骨引
出之又蟻做窠須置一浅盆坐水使蟻不能渡といへり○土蚕と

いふものあり。百両金紫金牛柑橘橙類の葉のうらに砂の如小さき虫
多く付ときハ葉落て傷るなり。つきはじめの時ハ刷毛にて水を澆洗て
よし。又柑橘建蘭類に疥の如かたく扁き虫を生ずと群芳譜に。是ハ
蘭虱といふものなり。去法ハ魚洗汁をそゝぐ或ハ大蒜を擂てあらひ
解すれバすぐに洗べし○土中に生ずる糸虫と云あり。形糸の如ほそくして
長さ二三分色白し。是肥により湿熱より生ずるなり。草の根を腐らせる
ものなり。集り居る所を土ともに取捨てよし○桃樹に生ずる小さき
蠐螬あり。初ハ黄なり。のちに色蒼青し。掃帚にて払べし。此虫桃
実の皮よりくひ入て実を喰○螟蛉ハ菘蘿蔔菘などに付葉を
虫なり。毎朝指捻べし○蠐螬ハ土中に大なる蝶飛来て葡萄薯蕷

類の新枝へ卵をうミ付く。出なり二三日めに二三分のいもむしとなる。青きめの葉色のかの黒きめ斑あり。生長されバ指の大さになり。脊に星ありて眼のごとし○橘蟲と云あり。橘柑橙柚茱萸椒類の香ある木に多し。これを蝶飛来て卵を彩枝へ着る。之是ハ頭大にして蚕の如く、觜を挟ハ黄赤色の角を出し甚臭し○尺蠖ハ諸木に生ずとよく見て拾ふべし○蚝蟲ハ種々あり。梅桃李林檎などの枝に卵を着置なり。形殻のごとし。冬の内に拾べし。此卵三四月頃かへりて虫となり。木の又ヘ巣をかけ数百あつまりて新葉を喰ふ。飛あるき色にて湯まり。是を取法ハ桃油を筆にて布に浸虫の巣へ拭ふべし。又油をたて焼てもよし。虫忽死すと○樹の根もと。

或ハ割竹の内。又ハ板屏壁などの日陰に。繭の如にして長く産付る卵あり。削さるべし。捺蚕と名ハ春になりて皆小さき毛虫となる。此頃に毛多くありて、脊に金色の光ある紙半夏大節といふ。枝或ハ樹の皮に居るなり○又八九月頃、桑櫻などにあるかしこ類の木又草の葉に生ずる桑樹蟲あり。初ハ蜘蛛の巣の様に見え、葉を紙喰尽などのごとく。其葉に茶袋の如し。巣の中なる母枝を切捨べし。捺蚕バ冬に至て虫出飛めぐる下ぎ。枯葉の下、或ハ土中に塞を凌ぎ、春になりて草木の芽出を喰又桃梅林檎等の実を食ひて害をなす○林檎海紅等に一種の毛蟲を生ず。三四月頃一葉巣になりて、段を立て一枝皆蜘蛛の巣の如になり。其葉を喰つくす。巣の小なる時葉をそへ枝を剪て捨べし

蟲の圖
黒小地蚕
木蝨
蘭蝨
一名かいがらむし
同上
木蠹蟲
糸むし

毛蟲
春桃などに多く生ず
桑樹蟲
橘蟲一名さんせうむし
菊虎
さんせうむし
半夏太郎の卵

すべて蠹ハ枯木の蠹となる。或ハ云此虫後に天のむしとなりて卵の文
稲葉に又実を喰害をなす○菊虎ハ形蛍に似て少し長し。菊艾䖳の
宿根より生ざるといへども葉ハ古根を挟て。又ハ早朝に出て
菊艾䖳の若芽を吸かたし。後へ卵を産置なり。其吸さる所二寸ほど横に
筋あり。下の吸ぬより折るゝ。茎を二つに割ハ中に黄色の長き卵あり
すべて蠹ハ菊の枝に喰入て蛀となる。秋になりて菊儀に枯るものなり
○さんせうむしハ形てんとうむしに似て黒く甲羽あり。夏の頃瞿麦の
花を喰ひ又柳に集りて葉を食ふ。又酸漿にも集り葉を食ものなり。
節を挿べし○蛞蝓蝸牛ハ草木の葉を喰ふ。色黒のむし早く捕べし
○鼹鼠ハ草木の根を掘あげ。害をなすゆゑ捕べし。捕やうハ竹にて筧を

あるハ土中に埋其中に捕ハ来らず。又妙法あり海参を切て所々へ埋
おけバ悉く逃去と云。ざるまへにハ虫を除ものなり○飛ちる毛虫に蚯蚓
升ととりハ。水抜悪なり捕払くさるものなり。無患子の殻を煎其汁を
澆ハ皆死ス。又生ある小便を澆べし。逃去もの跡へおそくそゝぐべし

風雨暑霜雪寒の節心得ある事

五雑組曰百草不畏雪而畏霜蓋雪生於雲陽位也。霜生於露陰
位也。不畏北風而畏西風蓋西転而北陰未艾也。北転而東陽已
生也○風烈時ハ鉢ものなど心づけ。接木大して鉢小き物へ添竹あり
下へおろすべし。又接穂ある草木に心付若竹などを竹の添して把てくへ。
其外の根の丈夫なる木へ竹を添し。ゆると結付置べし○大雨又

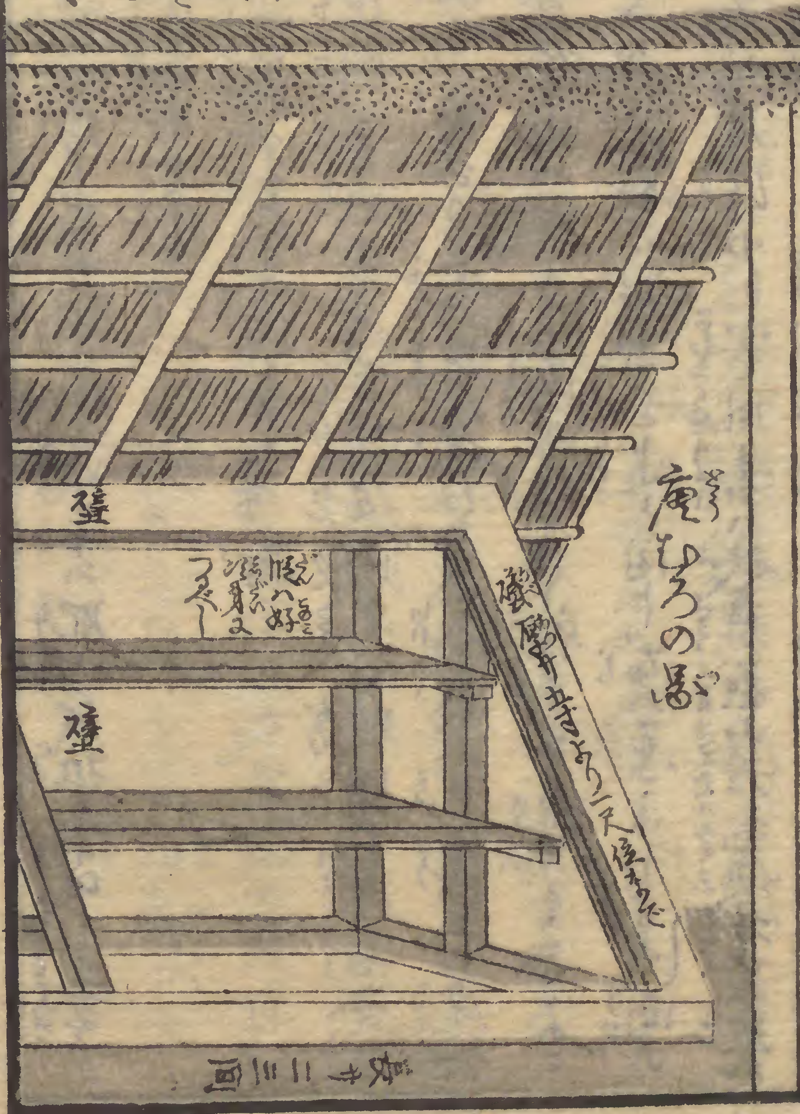
霖雨の節ハ建蘭の類松葉蘭百両金等ハ家内へ入置べし。雨気久く
降つゞかバ追て根のくさり易類を家へ入べし○暑気ハ南向の節ハ鉢くさ
き付水飲灌べし。日中までに土白く乾バ根へぞろ〳〵灌べし日陰よるれバ
葉のうへより灌てよし。又陰を好植物ハ暑中にハ蘆簀を二重まで覆べし
○十月中旬に藁菰など如く。南向にかこひをこしらへ鉢植を入置なり。
日さしハ土際までさしこむやうに下し。北風を防べし。又盆栽にて寒よはき類ハ
穀へのうつき地を掘て鉢ながら植よし。落葉を集て埋てよし。齊民要術曰
放火作煴少得煙氣則免於霜種樹書曰棘能辟霜花果以棘園
中郎茂○雪降前よりハ枝細くして折易物ハ竹を添結置べし。きり
しまなどハ縄にて巻置べし。松の枝又竹などを雪にて折る

あのより節を振ひ落してよし○寒中にハ肥たる土を抹茶など置べし。むしろの
ゐより寒の痛あるべし

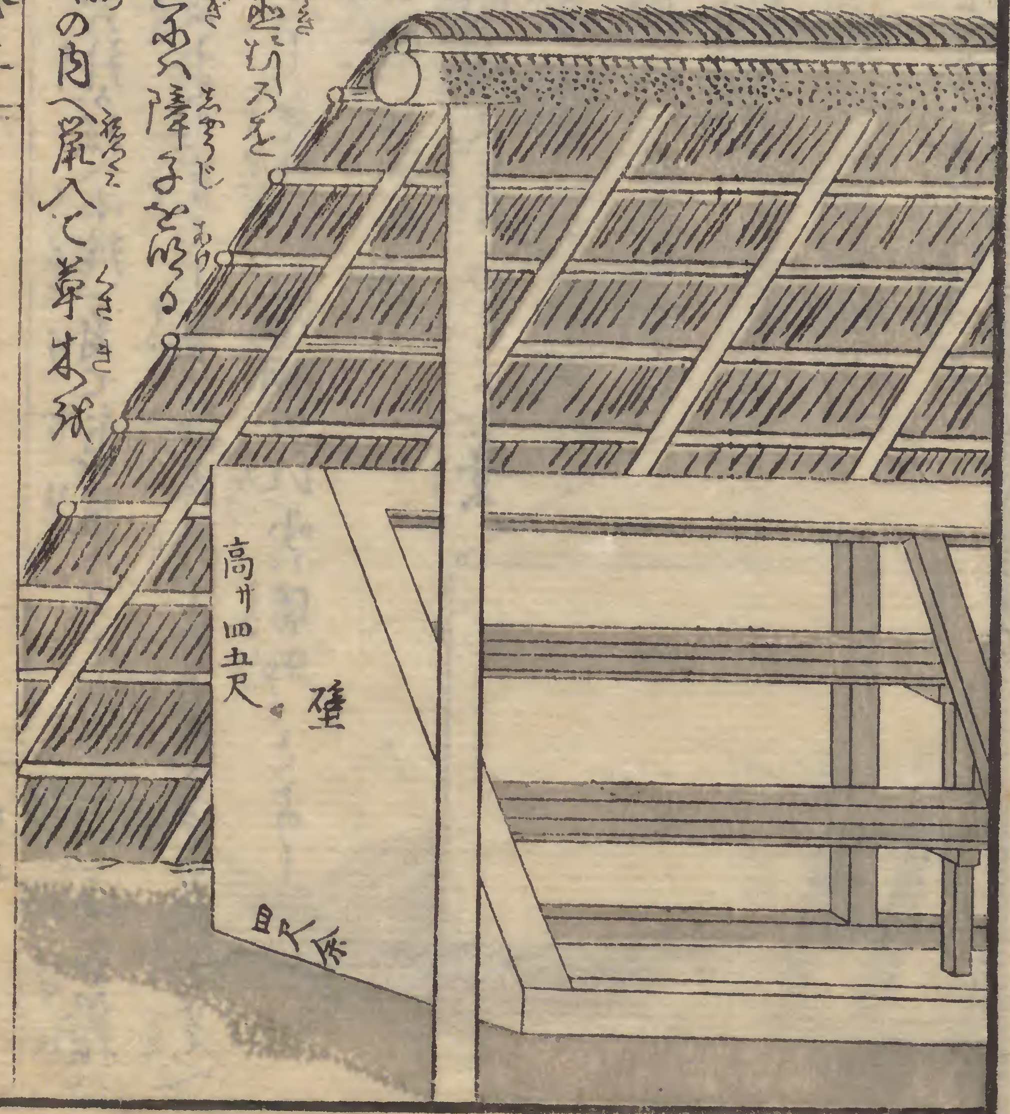
塘窖ぬまだ仕事 并 圖

按に本邦の北国寒地などく天竺安南等の暖国の草木を植
るハ冬の手当出かう要なり。冬ハ清庵むろに入置べし。其庵むろの建様
ハ寒て南あきたる地ハ稀よし。南に陰なく朝日より夕日までよく
あたる所へ建べし。形ハ図の如蔵を建と同じ。土ハ厚き程よし。南の
方清障子なり。九月頃にも寒風来ハ扶桑花山丹花使君子の類ハ
早く塘の内へ入障子をうけ置べし。其余の類ハ十月中旬より。嶺南瑠球等
の暖国より来る草木ハ皆入べし。其内日陰を好物ハ奥へ入。前にハ日

龍舌草覇王樹の乾を好むものハ塘の内ハ土乾ゆへ水を折々かけべし。天晴て暖き日中ハ障子をひらくべし。日没あくるもよし。然ども南風吹時ハ障子をひらかするども寒気の南風ハよし。悪し。又



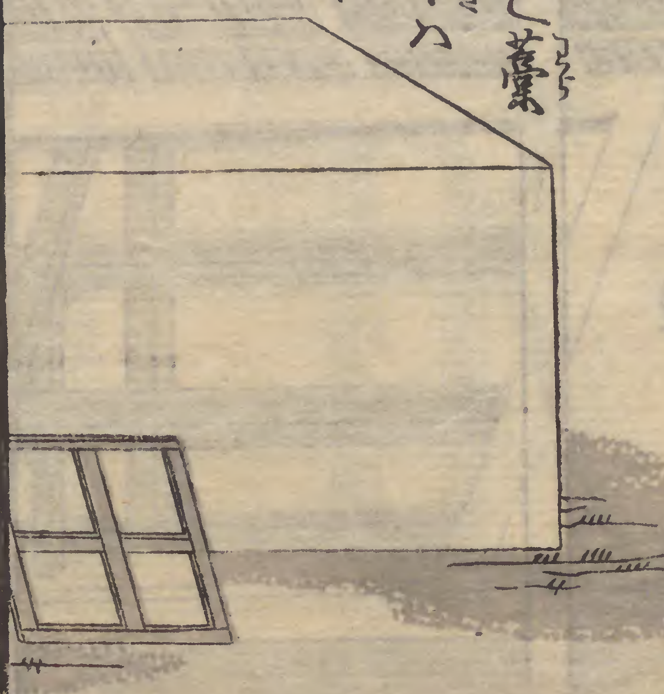
曇りたる日ハなるべく障子をひらくべからず。夕七ッ時頃より酒むしろを二三重より四重も覆べし。寒気甚しき織ふくろをきせむしろを重ねべし。八ッ時ころハ障子を明るべし。又塘の内へ風入て草木枯



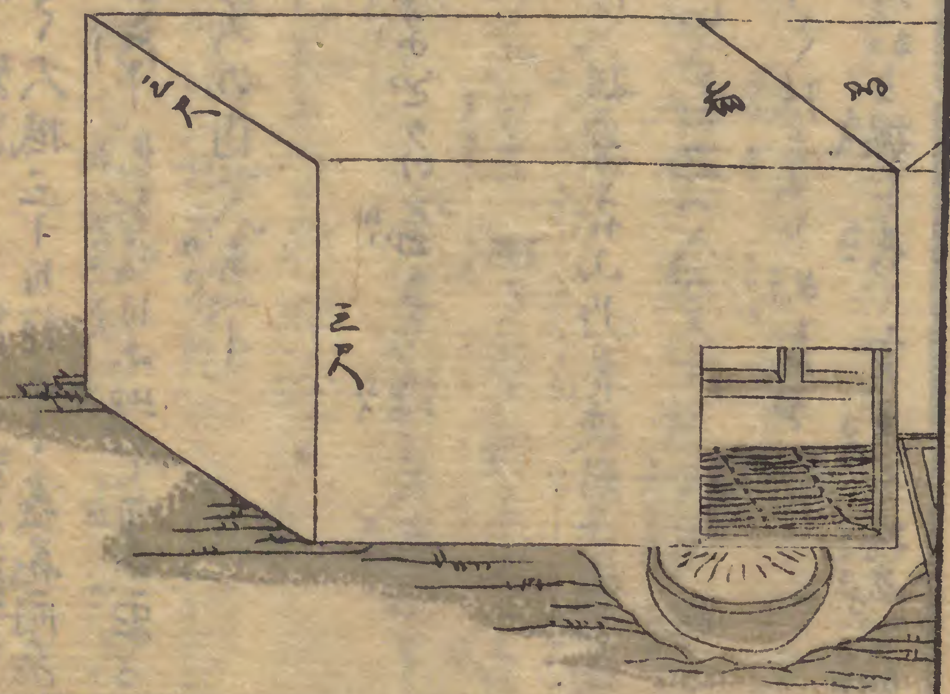
陰にあり。其囲ハ竹或ハ小板を付て置ハ嵐入らぬやうにすると云。暖地の家根ハ
茅にても杉皮にても葺べし。春の彼岸頃より丈夫なるものを出し
追々出すべし。唐蘭類ハ清明の頃出すべし

方燈むろの図

其造様ハ南向よし。茅ぶきを藁
ぶきも雨覆を掛べし。ざしきの下ハ
地まで葺おろすなり。其脇ハ打たるべく
草むろハ雨覆の如くにして其周へ
図のごとく。後ハ壁ぬりするもあり。
又障子ふくもよし。腰障子と



合せ接木を入て合せ目を閉る故
なるべし。むろへ入るものハ梅桃櫻海
紅富貴の類。其外諸の花木なく
花を開せんと思ふものハ是へ入べし。
内の格子を立る左右に小く口を
あけ置べし。外よりむろの上へかけて
土を掘て火鉢ハ炭火をよく埋
消ぬ様によく入べし。尤も寒日ハ
昼も火を絶さぬなど。むろの内
火のある所は上ハ紙をもつて覆く



上へ濕むしろをおくべし。此むしろへ入て大抵二十日許にて盡花開
なり。然ども梅ハ白咲、紅梅ハ色薄し。是を暖日に出して日にあてる
時ハ色を出すなり。又夕方よりむしろの内へ入おくべし

窖作る事

あなぐらハ南向に入口を明障子をかけおくなり。深さ五六尺より
一丈ばかり深く掘り板を平にしく。又四方へ棚を拵へ植木を入おく
なり。然ども窖ハ湿氣多き故扶桑花山丹花使君子覇王樹
の類の陽氣を好く甚寒にいたむものハ入べからず。必腐るも
のなり。さして寒氣を恐れずして陰氣を好む類を入べし○又
大きなるむろと云なり。是ハ上から掘をもちくるなり。大きな植木を置

閒を紙中を通りよくなり。其上へ樽の様に木紙渋し箸紙
あてつけ。又へ木紙つけるも。ある厚紙よし。南方ぼして物を
置り。夜ハむしろにて覆べし。是に入る物ハ。萬年青石蕙
又ハ萬木類。其外物を入てよし

土藏の事

塗壷を同。東西へもく建皆塗ぼして。入口も窓も皆南向に明
ケ障子をかけ。夜ハ戸をさして是に入る草木ハ格別寒を恐
ざる百両金珠砂根蘭の類。其外斑入物名木類を入べし。又もろさ
土地なくハ藏の縁の下を掘窖にして。又植木を入べし。上の家根へ
茅葺又ハ瓦にてもよし

種樹運送の事

地錦抄に云。植木草花ハ遠国へ持行ハ海陸ともに籠に入るがよし。せまきだんハ又桶に植るハ土重し悪重して送るも水の加減むつかしきもの内に水溜く根くさる事あり。籠ハ水多くかけても通りて溜らず根よき程湿を合み溜らずしてよし。陰所ハ暑も寒も凌ぎ損ざる元気ほど二ッ三ッ重ねして遠へ籠の大きさかんがへて為し。大方味甜籠よし。籠の内にいとこまかなる紙数植木一本ッヽ土葉をゆるく枝を巻よせ根とに入る木数を入て程よく目ばり入るもよし。水苔にくつめる若きハ土葉を和らげて土けの根よ揉て入るが土を苔にかけるものなり。籠の上へ紙割竹をそへろ

かごにいれ。おほひ又いとこまかく莚にて日のさゝぬ様に覆ひ置べし。一夜づゝ水をかけ。夏ハ三日五日に一夜づゝ紙にてつゝむ事もあり。気のよきものを吟味すべし。但も摺えびらかけべし。莚に紙にくるむ事を忘るなり。雨障ば乗る人のかゝらぬやうによく覆ふべし

草木育種巻之上終

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
日本政府圖書
消印

国立公文書館
National Archives of Japan